P1-034

Emotionality Activity Sociability and Impulsivity Survey (EASI) の測定不変性および幼児の気質構造の検討

大橋 優紀子[1,2]、北村 俊則[1,2,3]

[1]北村メンタルヘルス研究所
[2]こころの診療科きたむら醫院
[3]北村メンタルヘルス学術振興財団

【目的】
Buss & Plomin (1975) により開発されたEmotionality Activity Sociability and Impulsivity Survey (EASI) は、世界各国で広く使用されている気質測定尺度の一つであり、日本人幼児における信頼性妥当性はKitamura et al. (2014) により確認されている。本研究では、EASIの測定不変性および幼児の気質構造について検討した。

【方法】
調査時（2018年4月）に3～4歳（36～59か月)の幼児を対象児とし、インターネットリサーチにより、対象児を直接養育している親900人から、対象児と回答者の年齢、性別および、対象児のEASI（全20項目）への回答を得た。うち300人から、1か月後に再度、対象児のEASIへの回答を得た。確認的因子分析により、先行研究で提案されたオリジナルモデルの適合度を確認した上で、EASI各下位尺度のCronbach α係数を指標とした項目の削除および、因子間相関、適合度を参考にした理論的検討により、モデルを洗練させた。得られた最良モデルについて、多母集団同時解析により、親の性別、児の性別、児の年齢、測定時期の違いについて測定不変性を確認した。本研究は、北村メンタルヘルス研究所倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】
オリジナルモデルから6つの項目を削除した結果、4つの下位尺度（Emotionality, Activity, Sociability, Impulsivity）のCronbach α係数はそれぞれ、.72、.72、.71、.71となった。理論的検討により、EmotionalityとImpulsivityに負荷する観測変数を説明する一般因子をおいた（部分）双因子モデルが最良モデルとされた（χ^2=250.48, df=63, CFI=.95, RMSEA=.51)。親の性別の違いによる測定不変性を担保するために、さらに2項目を削除したモデルでは、各項目の因子負荷量、切片、誤差分散の等値制約いずれにおいても適合度の悪化がみられなかった（ΔCFI ≦.01)。児の性別、児の年齢（3歳と4歳)、測定時期（1回目と2回目）の違いについても同様であった。最終モデルは12項目4因子（部分双因子）構造となった。

【考察】
EASIのオリジナルの理論に基づく因子構造が確認された。モデルを洗練させた結果、評定する親の性別、児の性別、児の年齢、反復測定について強い測定不変性が満たされた。また、EmotionalityとImpulsivityの観測変数に共通する一般因子の存在が示唆された。EASIの構造不変性については今後の検討が必要である。本研究はJSPS科研費JP16K12170の助成を受けて実施した。

Presented by Medical*Online